

# 東京湾の生業利用における価値について

## A Study on the value of “subsistence use” of the Tokyo Bay

鈴木 覚\*・磯部 雅彦\*\*・工藤 孝浩\*\*\*  
Satoru SUZUKI, Masahiko ISOBE and Takahiro KUDOU

**要旨：**本研究は東京湾の沿岸で行われていた生業の非経済的な価値について検討したものである。東京湾はわが国経済の発展の基盤となる臨海工業地帯や首都圏にふさわしい都市の形成を目的とした埋立等の沿岸開発が大規模に行われた。そのためにかつての江戸前文化を代表した海苔養殖や漁業などの生業は衰退した。経済が成熟化し、都市社会のコミュニティ再生や新たな豊かさが模索される現在、東京湾の自然の非経済的な価値（精神的・文化的価値など）を明らかにすることが重要となっている。本論文では、かつて生業に従事した人々の暮らしの資料収集整理・聞き取り調査を行い、生業に従事した人々の発言やその活動について、稼ぎという経済的な目的以外の非経済的な価値の存在について考察した。その結果、東京湾の生業は自然と人々とが互に関わりながら生計を維持する（経済的価値）とともに、生業を通じて人と人がつながるコミュニティや地域社会文化が形成され、自然との関わりそのものに生甲斐などの非経済的価値を明らかにし、こうした関わりを現代社会に即して再生することが求められていることを考察した。

### 1. はじめに

近年の沿岸域における公共事業についての事業評価は主として経済便益や費用対効果分析手法によって主に実施されている。鈴木・磯部<sup>1)</sup>は、東京湾における干潟の浄化やレクリエーション等の生態系サービスの便益を代替法・旅行費用法や便益移転法によって評価している。これらの便益は数十億～数百億円以上になると推計されたが、港湾等経済産業的な利用の経済効果は、これらを大きく上回っており、現実に雇用をもたらしている。したがって単に経済的な価値評価だけでは、自然再生に関して十分な社会的合意が得られない可能性がある。しかし自然を相手とする海辺の生業には、経済的手法では評価しきれない社会的・精神的な重要性があることが考えられる。実際、里山や里川における生業には、経済価値だけでは理解

することのできない価値があると報告されている<sup>2)</sup>。本研究では、生業とは人々が生きていく“なりわい”（生産活動＝経済的な活動）を意味し、自然との関わりという視点から「自然の持つ多様な機能から労働・生活に役立つ様々な価値を引き出す活動」（春田，2008）<sup>3)</sup>と定義して検討するものとする。なお文中では漁業という用語を用いているが漁業とは、経済活動としての漁獲活動を意味するものとする。

本研究は東京湾におけるかつての生業における非経済的な価値・重要性について、歴史的資料整理や聞き取り調査に基づいて検討したものである。

### 2. 研究の方法

#### 2.1 研究の意義

東京湾において漁業を生業とする人々の暮らし

\* 学生会員 海辺づくり研究会（東京大学 新領域創成科学研究科），\*\* 正会員 東京大学 新領域創成科学研究科教授，\*\*\* 非会員 神奈川県水産技術センター

ぶりは「羽田史誌」<sup>4)</sup>等の地域誌、民俗調査報告の「東京湾の漁撈と人生」<sup>5)</sup>に記載されているが、その意味や重要性が今日につながるものであるとした研究事例はほとんどない。例えば柿崎(1978)<sup>6)</sup>は千葉県漁村を例に沿岸の漁村共同体の形成発展の過程、沿岸の埋立開発とともに消滅していくプロセスを明らかにし、自然利用の放棄とともに、地域社会の緊密なネットワークが急速に衰退したことを示した。この研究は漁業協同組合や地域の自治組織などオフィシャルなネットワークを中心に取り上げているが、地域社会にある「もやい」(後述)といった非公式なつながりを含めた重層的なネットワークは検討していない。また、生業にあった精神的な重要性についても言及されていない。

東京湾は高度に物流や工業、都市機能など高度に利用されており、今後環境の再生や自然の保全や利用のあり方を検討する上では、こうした価値研究が重要になっていると考える。

## 2.2 研究の進め方

はじめに、沿岸自治体の市史や区史などの歴史資料から、かつての東京湾の生業としての利用の特性とその変遷について整理する。次いで、生業に従事した人々への聞き取りを行い、前述の整理内容と合わせて、かつてのくらしの様々なエピソードから、話し手の行動や考え方にどのような動機(経済的動機と非経済的動機)や人と人とのつながりを整理し、そこから生業にあった非経済的価値について考察する。聞き取り調査は、羽田周辺地域において、2006年11月から2008年11月にかけて7回実施した。聞き取り側が3名程度、語り手も2~3人があつまり、子供の頃の暮らし、海苔養殖の努力、手繰り網漁、漁業権放棄から遊漁船業への転換などのテーマを決め、毎回交代で主要な語り手に話をしていただいた。結果はテー

プに録音し、できるだけ忠実に復元し、後日それを話し手に見てもらい、確認した。なお、聞き取り調査は港湾空間高度化環境研究センター、羽田周辺水域環境調査研究委員会、NPO 法人海辺つくり研究会が実施したものである。

## 3. 近世以降の生業利用の特性と変遷

品川区史<sup>7)</sup>に「漁業の発達には微々たるもので…本格的に発達したのは近世以降である」とあるように東京湾が高度に利用され今日につながる文化や伝統が主に築かれたのは江戸時代以降である。近世の東京湾は、海苔養殖、沿岸漁業、バンドウアオサや雑魚貝類等の肥料取り、副業や自家消費のための魚貝の採取、潮干狩り・釣りなどのレクリエーション<sup>8)</sup>、塩田、都市開発や新田作り、あるいは塵芥(ゴミ)処分を目的とした埋立<sup>9)</sup>など様々に利用されていた。

### 3.1 近世の生業

#### 3.1.1 生業である漁業の発展要因

漁業の発展要因として、漁獲物の多様性に加えて、幕府の開設にともなう都市整備の一環として漁業の振興が図られたこと、都市経済が発展し、魚貝類の需要が拡大したことなどが挙げられる。

第一には関西から技術や人材の導入があった。「慶長17年(1612)に摂州佃村の漁師集団が江戸にくんだり、小石川の安藤対馬守邸その後小網町の石川大隅邸に居住して白魚漁を始め、漁獲物を幕府に献上した」<sup>10)</sup>という記録にみられるように、幕府は、関西から漁師を招き、先進的な漁法を東京湾に導入するなど漁業の振興を図った。

第二には地域漁業が保護された。芝・金杉や羽田等、地元には漁師が、幕府への貢献から漁業を認められたという伝承<sup>11)</sup>がある。例えば、本芝浦と金杉浦は、「家康入国の際に、芝浦で舟が座礁し、これを本芝浦と金杉浦の漁師たちが数十艘の船を出して

これを救出した。この功績により『水三合あるところどこでも漁をしてよい』という免許を得る。これに感謝して上品の魚がとれると江戸城に行き、伊那熊蔵を通じて献上した<sup>11)</sup> という伝承がある。

第三には商人が漁業に積極的に投資して漁業の発展に貢献した。例えば、商人が蓄養技術を江戸に伝え漁業発展に貢献したという事例がある。東京都内湾漁業興亡史<sup>11)</sup>には「元和2年(1616)泉州桜井町の大和屋助五郎が江戸に来て魚商となり、生簀方を考案する。寛永年中に(1624-1644)に駿河地方の漁夫と契約し、蓄養した上で生鯛を江戸に輸送販売する」という記述がある。

### 3.1.2 漁場紛争から見た生業の特性

図-1に示すように非常に多くの猟師村や磯付百姓村があった。猟師町は、漁業を生業とする村であり、磯付百姓村は地付きの磯漁と肥取漁に限定された村であった<sup>6)</sup>。これらの猟師町や磯付百姓村などの集落間には争いが絶え間なく発生した<sup>12)</sup>。例えば佃島と小網町が隅田川の漁場をめぐる激しく争ったように紛争事例<sup>10)</sup>が数多く残されている。また、湾内の漁法を38種類に制限した文化13年には議定書<sup>4)</sup>が交わされ、東京湾内で協力し合うことを約している。こうした紛争は磯付村などの本格的な漁業が禁止された村からの漁業への参入圧力が強く、沿岸地域では東京湾の豊かさから漁業に大きな期待が寄せられていたことを物語る。漁業の豊かさへの期待は昭和の戦争直後の沿岸地域で「工場もなく仕事はなかったが、漁業をやれば何とか食えた」(羽田I氏聞き取り)という近代まで続いたと考えられる。

### 3.1.3 近世漁業の特性のまとめ

以上みたように近世の生業である漁業には次のような特性があった。

- ・東京湾の漁業(生業)は幕府の振興政策や幕府

との直接的な関係性によって発展し、社会的・制度的な支えがあったこと。

- ・東京湾の漁業(生業)は商業資本との関係を通じて発展し、経済的な支えがあった。
- ・漁場を巡る集落間の紛争は集落内の共同体の絆を一層強めたと考えられる。また、紛争の解決を通じて東京湾の生物資源利用に関連して自治的管理の概念が生まれてきた。

また、漁業は江戸前の食文化を生み出し、白魚漁や海苔養殖の作業は江戸名所図絵に描かれるなど江戸の風物詩として親しまれた。また、釣りや潮干狩り、舟遊びも活発に行なわれ<sup>13)</sup>、東京湾の生態系資源は人々の生活に潤いをもたらしていたと考えられる。



図-1 明和6年(1769)の漁村集落  
大田区史<sup>14)</sup>を参考に作成

### 3.2 近代利用の特性と変遷

明治以降、江戸時代の慣習(旧慣と呼んだ)を政府が否定したため漁場は非常に混乱した。その後旧慣を尊重する法令を出し、旧漁業法が制定された。旧漁業法により沿岸漁村は漁業協同組合を結成し、より合理的な漁場管理が進められた。漁業技術の発展や制度の安定化にともなって、漁獲

量<sup>15),16),17),18)</sup>は図-2に示すように1910年代から1930年代にかけて増大した。

大森では海苔場の権利を貸与して得た資金で小学校を建設し、羽田では小学校の講堂を建設するなど地域に貢献した<sup>4)</sup>。富津では、関東大震災の罹災者への援助をタイラギ漁などの漁業収益から行なった<sup>19)</sup>。このように、漁業は地域経済にとっての基幹産業であり、重要な位置づけがあった。

しかし、近代化を急ぐ政府は工業や港湾などの立地空間としての東京湾利用が国家的な課題<sup>20)</sup>となり、東京湾の生業利用の地位は幕府と直接結びついていた近世に比べて低下した。

第二次世界大戦後は、経済の高度成長が国家の最重要課題となり、大規模な沿岸開発が必要となった。また、沿岸人口の増加、工場等からの汚水の排出等にもとない漁業生産は減少に転じた。特に東京都の漁獲量は1962(昭和37)年に漁業権を全面放棄したために激減した。

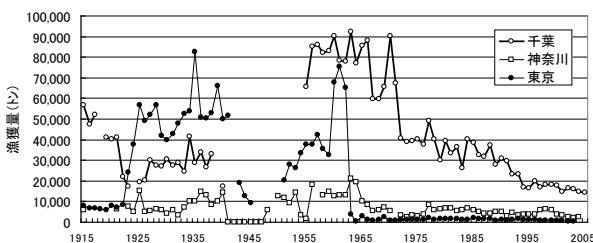


図-2 明治以降東京湾内の漁獲量の推移(トン)

以上、近代に入ってから多様な生態系サービス利用があった。漁業は漁業法などが制定され漁業者間の紛争は鎮静化したが、産業としての位置づけは地域経済にとっては重要であったものの、近代都市化を目指す東京湾沿岸は港湾や都市開発が次第に優先されるようになっていった。それとともに新たな沿岸の都市文化も生まれたが、その後急速な経済成長や産業化にもとない東京湾と人々との文化的なつながりは弱まってきた。

#### 4. 生業の特性と非経済的な価値について

1911(明治44)年の東京湾の漁業の状況を表-1に示す。漁家戸数は約2.7万戸で従事者は8万6千人を超え、海苔と合わせた生産量は約5万トン、漁獲金額は400万円以上であった。このような漁業に従事し生業を営む人々の暮らしはどんなものであったろうか?羽田および川崎市大師河原の人々に対する聞き取りや関連する資料からその暮らしぶりを調査した。生業は海の豊かさを実感できるものであったが、同時に作業は危険を伴い、つらく厳しいものでもあった。そうした生業を続けることができた背景には単に経済的利益の追求だけでなく“精神的な価値”が生業そのものにあったこと、また海の自然を媒介にして重層的で強い“人と人とのつながり”が地域社会にあったことが明らかになった。

表-1 1911(明治44)年の東京湾の漁業<sup>15),16),17)</sup>

	東京	千葉	神奈川	合計
漁家戸数(戸)	6,514	11,904	8,421	26,839
漁民(人)	14,841	54,545	17,222	86,608
漁獲量(トン)	6,766	33,570	4,315	44,651
漁獲金額(円)	350,297	2,125,587	494,169	2,970,053
海苔生産量(トン)	2,580	1,957	358	4,894
海苔生産額(円)	988,882	286,616	129,715	1,405,213

出典：1911年東京府統計書、神奈川県統計書、千葉県統計書  
1911年の物価は2000年の1/2922である(日銀消費者物価表より)

##### 4.1 生業の特性

東京湾は、豊かな海であり、大きな収入を得られたが、漁獲量は不安定であり、厳しい自然条件の中で操業は常に危険をともなった。安定した水揚げを得るためには、熟練した技術と、様々な情報を仕入れ自分の才覚と責任で決断し行動することが求められた。

##### 4.1.1 豊かな海

漁業の生産は豊かさを地域の人々にもたらした。例えば、岡村<sup>21)</sup>は海苔養殖を随分つらい仕事であるから、割でも良くなければ引き合わないとしており、明治38年頃の大森海苔漁業者の年間売上

を 350 円、利益を約 122 円程度と見積もっている。明治 18 年の渡辺東京府知事巡察日記<sup>22)</sup>によれば羽田周辺の漁師の年間収入は 300 円であったという。明治 20 年前後の平均的国民収入の約 3~7 倍である。羽田や川崎の人々の話にも、以下のようなエピソードがある。

「戦後は工場も焼け仕事もなかったが、海に出れば生活ができる有難いものだった(羽田 I 氏)。」

「夜中に海苔を盗む海賊が来た。海苔網は海にお札を浮かべているようなものだ(川崎 K 氏)。」

「羽田小学校の講堂を建てるために、海苔の養殖場権利を貸した収入を当てた(羽田 I 氏)。」

「クルマエビを捕っていると一貫も取れば採算があった(羽田 I 2 氏)。」

「終戦直後には、海に行つてハゼを手づかみにした。いくらでも取れた(川崎 K 氏)。」

#### 4.1.2 不安定な漁獲

第二次世界大戦前の海苔生産量は図-3 に示すように好不況の変化が激しく安定していない。横浜柴村ではみこしを担ぐときに「あしたあにゃあど」という<sup>23)</sup>。これは、明日は分からないという不安定な漁業の日常を言い表している。また、海苔は昭和の中ごろまで“運草”といわれ、豊作・不作の変化が大きいことを意味した。

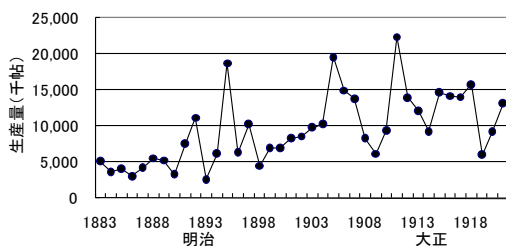


図-3 明治~大正期の海苔生産量の推移

また、作業の危険性や不安定さについて次のように語っていた。

「海は板子一枚下は地獄というのが本当に危険だった(羽田 S 氏)。」

「冬の夜の海苔取りがとてつらくて、あまりに寒くて、我慢がどうにもできなく、どうしてしびれた手を温めたかという自分のおしっこだった(川崎 I 氏)。」

「(海苔養殖は)毎年、博打のような漁業だった。すぐ隣で、青のりがつくかつかないとかで(収益が)違っていた(川崎 K 氏)。」

#### 4.2 生業における精神的な価値について

生業は、上記のように豊かな東京湾からの恵みを受けるものであったが、同時に厳しく、危険な作業をとまっていた。豊かな資源を享受するためには大変な努力や工夫が必要であり、そこから充実感や仕事のやりがいを得ていた。また、危険や漁獲の不安定さは信仰と結びつき地域の祭りや年中行事などの生活文化を生み出すことになった。

以下に仕事に打ち込む努力や工夫などを通じて漁業者が得ていた精神的な価値について検討する。

伊東<sup>24)</sup>は、漁で何が面白かったかといえば、スズキの一本釣りにかなうものはないという。その理由は、非常に微妙な技術を苦勞して会得した結果、「名人」といわれるように評価されることに、前述のように大きな稼ぎがあることが加わることによる。

そのほか、延縄漁、投網漁など漁業種ごとに様々な技術の習得が必要<sup>25)</sup>であり、いつ・どこにどんな魚貝がいるかを知るといった自然を読む力が必要であり、経験や知識を生かすことが求められる職業であった。こうした努力などを行っていた人々から聞き取りデータを以下に示し、その意味するところを考察する。

発言 1「うたせ網漁業は東京湾の入会であり、自分の才覚でどこに魚がいるかを見つける必要があった(羽田 I 氏)。」この発言から、漁業は自分の経験・能力で稼ぐ必要のある仕事であり、成功した時の達成感や充実感を、経済的対価とともに

に得ていたこと、あるいは自立しているという誇りのようなものがあることが考えられる。

発言 2「網ヒビへの転換でどの段にノリが付着するかの研究に心血を注いだ結果、誰でも（海苔養殖が）出来るようになった（羽田 I 氏）。」この発言から、新しい技術の導入研究に取り組み、その成果が社会的な貢献をもたらしたという満足感もあったことが考えられる。

発言 3「くじ引きで海苔柵場が決まるため、漁場の場所ごとに水温や潮の流れなどの情報を細かく調べておき、場所に応じてヒビの張り方を決めた（川崎 K 氏）。」この発言は海苔養殖に懸命に取り組む行動は当然より高い収益を目指したものであるが、その熱意と仕事への傾注は経済的価値以外の充実感を得ていたことを示唆するものである。

発言 4「漁師は稼いでも家や土地に投資することはない。船に投資する（羽田 S 氏）。」  
「最初は 16 万円（昭和 24 年ごろ）で船を買い、アカガイで儲けたらより大きい 36 万円の船に変えた（羽田 I 2 氏）。」これらの発言は、よりよい漁獲を目指すとともに、仕事に対する熱意が船への投資の動機とも考えられる。

発言 5「海苔の採苗法の普及が漁業権放棄の 10 年前だったら全面的な漁業権放棄はなかったかもしれない。ある意味で我々は（漁業を捨てた）戦争犯罪人かもしれない（羽田 I 氏）。」海苔の採苗法は昭和 29 年に確立し、普及したのは昭和 36 年頃である<sup>25)</sup>。I 氏は「漁業権放棄後、転業は概ね成功し生活は昔以上に安定した。」とも語っており、この発言は経済的な後悔ではない。また、「犯罪」という言葉には誰かに対する責任を意識しており、それは“後世の人々に漁業という生業を残しておかなかった”という後悔だと考えられる。したがって、単に過去を懐かしむ感情の吐露とも異なっている。

以上、生業に携わる人々にいずれも、経済的動機以外の仕事への傾注、社会的な貢献といった精神的な充足感を求め、あるいは感じさせる発言をしていること、発言 3 は千葉側の盤洲の海苔漁業者や行徳の海苔漁業者も語っており、多くの漁業者に共通する行動であること、また、「戦争犯罪人」と語った羽田 I 氏は網ヒビ転換への研究でも「誰でもできるようになった」と人への貢献を強調しており、発言に一貫性がみられること、などから、発言にある行動の動機には非経済的な価値を感じ取っていたものと考えられる。

表 2 発言内容からの生業活動の動機分析結果

聞き取りデータ	経済的動機	非経済的動機	その他の動機
発言 1：自分の才覚	○	○（自立・非疎外）	
発言 2：研究に心血を注ぐ	○	○（興味）	
発言 4：水温や潮の流れを細かく調べる	○	△仕事への傾注・充実感	
発言 5：漁師は船に投資した	○	○（道具へのこだわり）	○見栄
発言 6：（漁業を捨てた）戦争犯罪人だ	△	○	△後ろめたさ

なお、こうした発言の信ぴょう性、客観性については、それぞれの発言内容が、文献資料<sup>23),24)</sup>に示された生業記録や、他地域での東京湾漁業者への聞き取り結果（未発表）\*との整合性を検証した。たとえば、埋立により転業を余儀なくされた漁業者の転業後のアンケートでは 71%が漁業の方が働き甲斐があると答えている<sup>26)</sup>。

また、こうした生業の非経済的な価値は海以外の自然を相手とする生業からも認められている。例えば、大村は山ら<sup>27)</sup>の著書の中で「生業は確かに生存のための資源を確保すること以上の意味を持っている。イヌイトは自ら「大地」と共にある悦びと幸せを実感するために生業を実践し、自己

\*行徳の漁業者の聞き取りでは、「（漁業者の父）は海苔と会話しながら作業した」という。また、「盤洲漁業者の家には祖父が大正時代に記録したノートがある」という。

実現する喜びと幸せを味わう」と述べており、湯川ほか<sup>2)</sup>、三俣ほか<sup>28)</sup>は自然相手とする生業が経済的な価値以外の「働きがいのある仕事」、「地域住民であるための共同意識」であるといった解釈をしている。里川や里山などでの自然とふれあいがながらの労働活動には、人が必要とし、かつ経済的以外のものが存在していると判断できる。

### 4.3 地域社会とのつながり

生業の厳しさや危険を共同体の絆によって克服してきたことが考えられる。羽田地域の人々のつながりについて聞き取り調査結果から整理し、その絆について検討した。

#### 4.3.1 地域社会における人々のつながり

地域における人々のつながりの第一は、生業における共同体“もやい”である。「Oさんところは七福と言って7軒が一つのもやいを作って、共同作業をした。海苔ヒビの場所を決めるくじもあらかじめもやいで効率的に作業できるように一緒に引いた。もやい制度というものが団結力になったし、生活の面でもお互い助け合った。それが特に海苔は強い（羽田I氏）。」

第二には、他地区の漁業者ともつながっていた。漁業技術を他地区の漁業者から教わり、次の発言はその縁は今日まで続いていることを示すものである。「父は子安の知人から漁具を譲ってもらい、網の仕立て方から網のひき方までを教わった。子安の人たちも、昭和40年代の初めまでに陸に上がったが、今でも交流を続けている（羽田K氏）。」

第三には緊密な地域のごつながりもあった。例えば「小学校の運動会は地区対抗戦になって盛り上がった。のぼりや鉢巻をつくり、町内対抗リレーをやった。戦前には祭りでも地域の団結があった。地区別にみこしがあってそろいの半被を着た。他の地区のものにはさわらせなかった（羽田I氏）。」

第四には、漁業共同組合でのつながりが重要であったと考えられる。羽田地区は、海苔漁業の都南羽田漁業協同組合、貝巻漁業の羽田浦漁業協同組合およびたせ網漁の第三羽田漁業協同組合の3つに分かれ、漁業権はこれらの組合単位で総有されていた。

以上のような社会的なつながりを整理し、図-4に示す。こうしたつながりは「（羽田では地域の人は鍵をかけないんですよ（羽田I4氏）」といわれるほどに安全な街の形成につながった。

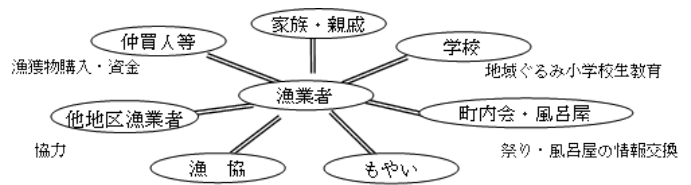


図-4 漁業者の社会的つながり

#### 4.3.2 地域の子供たちのつながり

子供たちのつながりで重要なものとして、学校と地域の密接な関係は次の発言から伺うことができる。「学校と町内会と一緒に活動するというのは羽田の特徴だった。各町会に子供会ができ、紙芝居や幻燈などを持って各町会で子供たちに教育的なものを見せていた。子供会活動では、地元の大学生が中心になって盛んに活動した（羽田I4氏）。」

また、広場などでの友達同士のつながりもあり、年齢の高い子供から低い子供までいわゆる縦のごつながりがあることが以下の発言から分かる。

「広場に行けば誰かいたので、そこで遊ぶことが出来た（羽田O氏）。」

「（砂の深堀跡があってそこに）知らない子は、そこに入り沈んでいくので助けようがない。そういう場所は先輩から下の子に“そこは近づいちゃ駄目だぞ”と言い伝えていた（川崎K氏）。」

さらに、街では大人たちともつながることがで

き、子供達は単に学校と家庭の往復ではなく、街でも様々な人々を関係性を持ちながら育っていた。

「朝鮮戦争のときに焼け跡から鉄くずを拾って売った。するとその中に不発弾があったりして、警察から注意されたりした。校外生活があり、様々な生活上の指導が重要であると学校でも考え、地域と共同して取り組んだ（羽田 I4 氏）。」

家業の手伝いをしたり、父親と一緒に海辺に行くなど家族の間近で育ち、家族とも親密なつながりがあった。

「父と一緒に海苔取り作業を手伝ったが、枝ばかりで仕事が増えた（羽田 I 氏、L 氏）。」

「父とアサリ採り（生業）に行き、カレイを見つけて得意顔だった（川崎 K 氏）。」

以上のように、地域の子供たちは図-5 に示すような様々なネットワークの中で成長した。

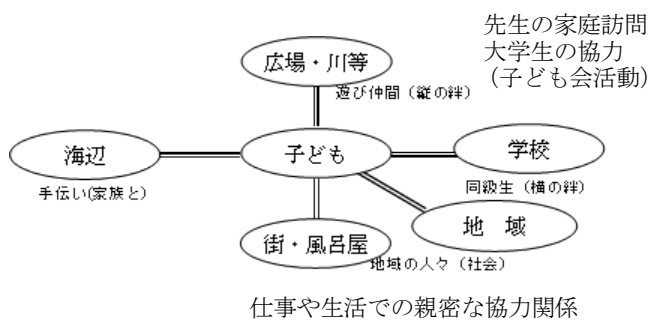


図-5 子どもの社会的つながり

## 5. まとめ

東京湾の生業（漁業）において見出される精神的な価値は、次のように整理された。

- ・自分の才能、努力によって経済的な成功を得ることの達成感・満足感が得られること。
- ・共同体のために技術開発や工夫を行い地域社会に貢献すること。
- ・地域、親族等様々なネットワークが存在し安心感があったこと。
- ・共有の海を持ち、丁場・組合・地域自治体とい

った組織への帰属意識があった。

- ・信仰と祭りによる安心と精神的な発散。

かつての東京湾で生業を営む人々は、東京湾の自然から大きく分けて2つの価値を得た。ひとつは生活の原資となる経済的な価値を得た。もう一つは生業を営むことを通じて、得られた精神的な価値である。精神的な価値は本論文ではふれなかったが、随所に存在する稲荷や神社等への日常的な祈りや信仰、漁業活動の暦（スケジュール）に応じた儀式や祭礼を行なうことで安心を得た<sup>29)</sup>。また、漁業活動は自分の才覚や工夫・努力が直接水揚げの多寡につながり、自分の労働とその成果は一体のものであり、疎外感といったものはなく精神的な充足感を得られるものであった。漁業活動は単独で行なう場合は少なく、海苔養殖も「もやい」といった小集団で協力しながら実施し、祭礼におけるみこし担ぎは地域の団結を確認する絶好の機会であった<sup>29)</sup>。地域社会や連帯組織への帰属は、例えば羽田では家の鍵をかけない（羽田 I4 氏聞き取り）と言われるように人々の心に安心感をもたらした。

東京湾は、図-6 に示すように経済活動を支える自然の生産基盤であるとともに、精神的ななりわいを支えるいわばコミュニティの基盤を形成していたと考えることができる。東京湾の自然を介した人々の紐帯は、近世より引き継がれてきた村前の海の共有、近代に入っては漁業権を共有したことにより一層強固なものとなっていた。ただし、海苔養殖については共同漁業権のほかに海苔株制度があって株を持つものと持たないもの間での競合も見られた<sup>29)</sup>。

このことは、東京湾の自然が単に生態系サービス<sup>30)</sup>を提供するだけの場ではなく、また手をつけず保護すべき価値を持った存在でもなく、人間と自然が不可分に関わりあっていたことを意味する。東京湾の生業から経済的な価値にとどまらず、仕



事に夢中になってしまうような精神的な充実感や生業を通じた人と人とのネットワークの形成、信仰や祭りなど生きていく上での精神的な価値など生業の定義を行ったところの「様々な価値を引き出す」活動であったといえる。

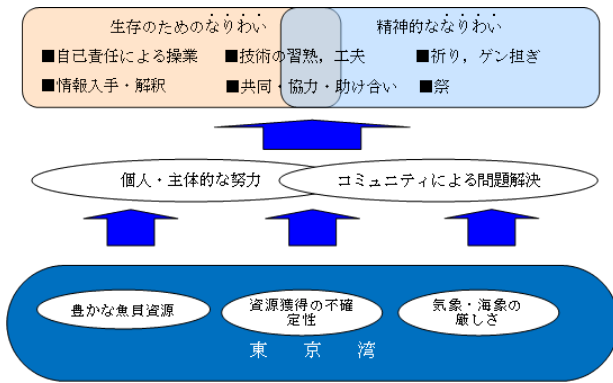


図-6 コミュニティ形成基盤としての東京湾

東京湾と沿岸地域の人々との関わりの再構築は、自然環境と人間との関わりが問われているなかで、一つのモデルとして重要な意義があるものと考えられる。特に、二酸化炭素の排出権取引など経済的な手法に依存する傾向にある環境へのアプローチに対して、自然との関わりが有する非経済的な重要性の配慮が重要であると考えられる。特に、今後の自然の保全や再生を図っていく上では食料や燃料といった自然生態系の供給サービスだけを再生するのではなく、特に精神的なサービスである文化サービスを含む生態系サービスの全体を再生する必要があるのではないだろうか？

かつての生業における非経済的な価値についての分析は、単に懐かしむだけの対象ではなく、上記のような今後の自然環境の保全や再生にとって重要な視点を提供しているものと考えられる。

今後は図6に示したような東京湾の機能は今日の都市社会で、具体的にどのような形で必要とされているかというニーズの側面や、再生するためにはどのようなプロセスや方法などに関して、研究すべき課題があると考えられる。

## 引用・参考文献

- 1) 鈴木覚・磯部雅彦：東京湾における生態系サービスの経済的な価値について，海洋開発論文集，VOL.23，pp20-33，2007
- 2) 湯川洋司・福澤昭司・菅豊：日本の民族 山と川，吉川弘文館，282p.，2008
- 3) 春田直紀：生業の登場と歴史学，（国立歴史民俗博物館編：生業からみる日本史，吉川弘文館，288p.，2008），pp.191-211，2008
- 4) 橋爪隆尚：羽田史誌，羽田神社，376p.，1975
- 5) 千葉県教育委員会：東京湾の漁撈と人生，236p.，1967
- 6) 柿崎京三：近代漁村集落の研究，お茶ノ水書房，476p.，1978
- 7) 品川区：品川区史，上巻，1204p.，1973
- 8) 高橋在久編：東京湾の歴史，築地書館，237p.，1993
- 9) 遠藤毅：東京都臨海域における埋立地造成の歴史，地学雑誌，pp.785-801，2004
- 10) 東京都：佃島と白魚漁業，都史紀要 26，206p.，1978
- 11) 東京都内湾漁業興亡史刊行会：東京都内湾漁業興亡史，853p.，1971
- 12) 原暉三：東京内湾漁業史料，国書刊行会，104p.，1977（1941年版の再発行）
- 13) 斎藤月岑：東都歳時記，1838
- 14) 大田区：大田区史，中巻，1189p.，1977
- 15) 東京都：東京都統計書（1873-1956）
- 16) 神奈川県統計書（1911-1956）
- 17) 千葉県統計書（1911-1956）
- 18) 農水省：農林水産統計（1957-2005）
- 19) 富津水産捕採史編集委員会：富津水産捕採史，ぎょうせい，286p.，1995
- 20) 東京都：市区改正と品海築港計画，歴史紀要 25，150p.，1976
- 21) 岡村金太郎：浅草海苔，373p.，1909

- 22) 大森漁業協同組合編集委員会：大森漁業史，大森漁業協同組合，778p., 1973
- 23) 柴漁業協同組合史編集委員会：柴漁業協同組合史，407p., 1990
- 24) 伊東嘉一郎：我が海，我が町，羽田漁師の今昔，心泉社，111p., 2002
- 25) 木の下達文：江戸前の海民一芝・金杉浦の記憶，港区教育委員会，2000
- 26) 増子義久：東京湾が死んだ日ルポ京葉臨海コンベンナート開発史，水曜社，261p., 1995
- 27) 山泰之，川田牧人，古川彰：環境民俗学，昭和堂，321p., 2008
- 28) 三俣学，森本早苗，室田武：コモンス研究のフロンティア，東大出版会，2008
- 29) 横山宗一郎；空港のとなり町羽田，94p., 1995
- 30) 横浜国立大学 21 世紀 COE 翻訳委員会：生態系サービスと人類の将来，オーム社，241p., 2007 (millennium ecosystem assessment)

### 著者紹介

#### 鈴木 覚

海辺つくり研究会理事（横浜市西区平沼 2-4-22）・株式会社 MACS 代表取締役，環境学博士，1975 年早稲田大学応用物理学科卒，同年 4 月国際航業株式会社に入社，2006 年株式会社 MACS 設立を経て現職。

#### 磯部雅彦

東京大学新領域科学研究科教授，工学博士。1975 年東京大学土木工学科卒。横浜国立大学土木工学科助教授，東京大学土木工学科教授等を経て，現職。2009 年 4 月より副学長。

#### 工藤孝浩

神奈川県水産技術センター主任研究員。1985 年東京水産大学（現，東京海洋大学）漁業生産学科卒業，同年神奈川県入庁。2 度の神奈川県水産課勤務を経て，1994 年から現職。

## A Study on the value of “subsistence use” of the Tokyo Bay

Satoru SUZUKI, Masahiko ISOBE and Takahiro KUDOU

**ABSTRACT** : This study is to investigate non-economical value of the “subsistence use” of Tokyo Bay. The occupation of the seaweed cultivation and fishing which represents the Edo culture has declined by reclamation and urban development of metropolitan area for economical purposes. It is very important to make clear the non-economical value of Tokyo Bay at the present moment when economic development has been achieved and new well-being is being groped. Non-economical value is thought to exist in the occupation of seaweed cultivation and fishing before the era of modern rapid economic growth. In this study non-economical value is investigated through analysis of the documents of lives and interview of the people engaged in fishery. The motives of the actions and statements not related with economical purposes were analyzed, and non-economical values were extracted. The non-economical values include spiritual value related with the purpose of life and strengthening the bond in local community.

**KEYWORDS** : *non-economical value, ecosystem assessment, Tokyo Bay, “subsistence use”, social relation in a local community*